



文藝
平野人森田恒友 (一)

小杉放庵

「此の好いお天氣に森田君はどうして居るだらう」と、二、三人の座談の際に云ひ出す者があつた。「えん側で日なたぼっこをして居るだらう」と山本鼎君が云つたので、いかにも当はまつた想像なので、皆で笑つてしまつた事がある。

まことに、ふと彼を思ひやる時、家に在ればえん側で庭の草を見て居る姿、旅にあれば、のそのそと川添ひ途を彷徨する姿を心にゑがき見るであらう。本を読んで居るところ、写生をして居るところを想像しない。彼は

非常な読書家では無かつたが、所謂書卷の気になるものを有して居たし、彼の素描と油絵とは、悉く自然の写生から得て居るのではあるが。

絵かきが写生に出る、絵具箱と画架と三脚とを提げて出れば何かを得て帰りたい。鉄砲撃ちが鉄砲を持つて出たやうなもので、獲物の無い事は少くも愉快なものではないであらう。ところが彼は、平気で一日、二日、三日を素手で宿屋に帰つて来る。彼の作るところの風景画、素描と油絵とは、さやうに奇抜な構図ではなく、いとも平凡な、どこにでも在るべき風景の一角に過ぎないのだが、だから、いくらでも掴んで来さうなものだが、さうでもない処を見ると、彼の眼中の野水と平原とは、どこも似たやうに見えて、実はいろいろな姿と心を持つて居る。其の時のこちらの心と向ふの心とが、うまく出会つた機会が無ければ、すなはち素手で帰るわけであつたらう。いや、其の上に尚、彼は写生する自身の尻の据えあんばいをも、此の際会の条件の一つにして居たであらう。彼は三脚に腰かくる事をきらつて、草の上に風呂敷などを敷いて、尻を落付けて描く癖のやうであつた。後ろにうるさい閑人も余りにたからず、ゆつくりと尻心の落付きのある場所、半日彼の友と話をして居たかつた違ひない。友人と云ふのは、野水とそして草原だ。

彼は自然を撫愛する。だが、彼は若い時から爺い臭く、中年以後は殊に老成の人であつたから、彼の撫愛は熱狂的ではなく、なごやかな寂びのある、いつにも変りなき撫愛であつたらう。既に自然を愛するが故に、彼の作画は、なさねばならぬ仕事では無かつた。自然の中に居る事が、即ち彼の結構なる時間であるから、写生の場所が見付らず、素手で宿屋に帰つた

とて、彼に不足は無かつたらう。いや、彼の画室の中で作られたところの、水墨画の材料は、此の彷徨逍遙の間に、をのづと心中に蓄積されたに違ひない。

えん側で、日なたぼっこをする彼、草原と野水との間を、ぶらぶらと彷徨する彼は、刺激と昂奮こうふんが大きらひであつた。つき合いでカフェの酒も呑む事はのむ。クツションの間に埋まつて、にやにやと笑つて他の昂奮こうふんを見て居るに過ぎない。江戸一流の料理、灘生なだ一本の酒、裾模様けいしやの藝妓の酌、ありがた迷惑な顔を座の一隅に見出すばかりだ。下総武蔵の宿屋の川魚料理で鯰鍋なますに地酒の時、彼はまことに安泰で満悦で、どうかまちがへば、小聲で唐詩とうしなどを口ずさむ。

『都新聞』 昭和八年四月十二日

文藝

平野人 森田恒友 (二)

小杉放庵

えん側で日向ぼっこをする彼は、他の友人に比べて、いかさま萬物臭よろずきものに思はれた。二次会のはしご酒に、彼を捉とらへる事はむつかしく、時として前約の会合を断ことわつてさへも来る。彼は自然を愛すると共に、人間を愛さぬわけは無かつたが、人間は屢々しばしばめんどうを持上げて、彼をして耐え難からしめる。詐いつはりをつかぬ彼は、他の偽いつはりりをも好まない。そこで彼には、多少の厭人癖えんじんがあつた。

だが、此の厭人癖と物臭さの、一半の原因は彼の胃袋の作用にもあつたであらう。彼は始終胃弱を訴へて居た。胃弱のくせに喰ひしんぼうで、相当の喰道楽でもあつた。相当と云ふ、立派などは云はれない。彼は東京、大阪一流の包丁を品評して、得々とする側ではなく、鯰なますや鱸とせう、羊大根ひつじたいこんの性根を云々する。つまり草原くさなほりと野水やすいとの間の、喰道楽であつたに過ぎない。あゝ彼の胃弱と喰ひしんぼう。四月八日お釈迦の日に彼の命を奪つたところの癌がんの病は、既に一朝一夕の話ではなかつた。

陶淵明の「帰田園居」の中に、「草を披ひらいて共に来往す」と云ふ一句がある。それを彼に見せた時にひどくおもしろがつて、それから田舎住いなかまひの話になり、お互に五十を越したら、「披草共来往」をやらうではないか、それがよからうと、いろいろ土地の選択など語り合つた事もある。五十は二、三年前に越したが、田舎引込みは実現に到らなかつた。都を離れて田舎に

住む画人も少くないが、眞に田園の画人と云はゞ、先づ牛久村の小川芋銭
 老一人であらう。小川老と彼は相口で、しんみりとした付き合ひ、お互に
 尊敬して居たやうであつた。田舎へは引つ込めなかつたが、心と仕事の上
 では、彼も亦まぎれもなき田園画人である。

山岳と溪流とが嫌ひなわけではないが、うまひ同行者でもなくば、一人
 で飛騨信州の山地に入るはおつくうな仕事、それで気心のお互に知り合つ
 た、草原と野水とに足を向ける。大宴会と四畳半と、芸者と女給とが、美
 しからぬわけでは無かつたが、我からアクチーフに遊びを求めると、おつ
 くうな仕事、水辺の小料理屋で、鮎の洗ひで独酌を行ひ、たまには素直な
 おかみさんに冗談を云つて笑つて居る方が、なんぼか気安い事であつたら
 う。彼の絵を喜ぶ者から見れば、五十三歳であれだけの仕事をして置いて
 くれゝば、ずみ分豊富な生活と云ふべきだ、とするかも知れぬ。一部の友
 達から見れば、さりとて素慥に過ぎて、ちとさびしい一生であつたと、こ
 ころ残り多からう。それも是れも、どうもあの、胃弱のしわざだ。

中野の家への最後の訪問の時、例の如く酒を出されたが、自身既に余り
 呑めずになつて居り、対談中に三度ほど生唾を吐きに立つた。それから間
 もなく千葉の病院入り、早手遅れの容態であつたと云ふから、此の放庵は、
 癌に盃を献じて居たわけ。

癌だとは、自身どうしても信ぜず、もちろん身辺の者も、医者も他の病
 気にして置く。見るかげもなく瘦せ黒ずんで、尚且つ、退院後の仕事や、
 旅行の予想などを話すので、こちらにも返詞に困つた。からだは衰へても、
 気は澄み切つて居る彼を、いゝかげんな出たら目であしらつて居るのが苦

しく、いつそ病名と死期とを打あけてやらうと云ひ出して、他の友人に留
 められた。

死んでから、日記の間に、二月頃書いたと覚しく、自宅告別式の模様を
 図入りで説明してあるを、細君が見出したので、ひどく気を打たれた。彼
 は知つて居た。ちゃんと覚悟して居ながら、人は死ぬまでは、死なぬつも
 りで居べき事をも、知つて居たのだ。(終)

『都新聞』 昭和八年四月十三日